

氏 名	森岡 薫
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第30号
学位授与年月日	令和2年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学 位 論 文	看護専門学校における新人教員のための教育実践自己研鑽モデルの 開発
論文審査委員	主査 桑名 佳代子 副査 真覚 健，齊藤 奈緒

論文の要旨

【目的】

本研究の目的は、看護専門学校における新人教員が、新人期に必要な教育実践能力を修得していく際の補助として活用できる教育実践自己研鑽モデルを開発することである。

【方法】

本研究は、2段階で行った。

第1段階：看護専門学校における新人教員がどのような自己研鑽を行ったのかを明らかにすることを目的に、看護教員歴が3～5年目の教員を研究参加者として、半構造的面接を行い、得られた内容を質的帰納的に分析し、自己研鑽の内容と構造を導き出した。

第2段階：第1段階の結果に文献検討を加え、119項目の質問表を作成し、全国の看護専門学校532施設の3年目以上の教員を対象に、郵送法による実態調査を行った。その回答から、最尤法、プロマックス回転、因子負荷量0.4以上の探索的因子分析を行い、因子構造の妥当性は、内的整合性としてCronbachの α 係数の算出と、2群比較による交差妥当性をもって検証した。因子構造からの自己研鑽の内容と、第1段階の質的データと比較検討しながら教育実践自己研鑽モデルを開発した。

倫理的配慮：研究参加の自由意思、断っても不利益はないこと等を文書で説明し、第1段階では同意書、第2段階では質問紙の返送をもって同意を確認した。宮城大学研究倫理専門委員会の承認〔第1段階（宮城大第1029号）、第2段階（宮城大第79号）〕を得て実施した。

【結果】

第1段階：研究参加者13名。平均年齢 44.9 ± 6.1 歳、臨床経験年数 17.5 ± 7.5 年、看護教員年数平均 3.4 ± 0.6 年であった。新人教員の教育実践に関する自己研鑽の内容として、【教員としての心構えを持つ】【教員としての働き方を予測する】【初めて担当する授業に取り組む】【教員としての実習指導に取り組む】【自分の授業を振り返る】【学生主体の授業を展開するための方法を検討する】【カリキュラムの内容を理解する】【学生指導の望ましい在り方を考える】の8カテゴリー、25のサブカテゴリー、116のコードが抽出された。

第2段階：回答数 300 名（回収率 28.2%）、有効回答数 298 名（28.0%）。自己研鑽モデルの項目として、因子分析の結果 13 因子 50 項目が得られた。各因子の Cronbach の α 係数は 0.692～0.921 で内的整合性が、2 群比較にて交差妥当性が認められた。第1段階で得られたカテゴリーの時間軸に沿って、14 因子 53 項目の教育実践自己研鑽モデルを開発した。

【結論】

1. 看護専門学校における新人教員のための 14 の自己研鑽の要素と、53 の具体的内容の妥当性の確認の基に、教育実践自己研鑽モデルが開発された。
2. 本自己研鑽モデルは、勤務異動を踏まえ、ベテランレベルの看護実践能力とポジティブな志向性を有する新人教員から得られたデータで構成されたモデルである。
3. 本自己研鑽モデルは、講義、実習指導など、新人教員が直面する課題と連動させ、就任決定から 2 年間の時系列に沿って、全体を見通せる構成である。
4. 本自己研鑽の内容は、新人教員が【自分の授業を振り返る】により、その気づきが、【学生主体の授業を展開するための方法を検討する】など、教育実践能力に適応する自己研鑽につながり、本モデルの活用が教育実践能力の向上に貢献することが期待される。

キーワード：自己研鑽 教育実践能力 新人看護教員 看護専門学校 モデル開発

審査結果の要旨

本学位論文の目的は、看護専門学校における新人教員が、新人期に必要な教育実践能力を修得していく際の補助として活用できる教育実践自己研鑽モデルを開発することである。本研究は、2 段階で行った。第1段階は、看護専門学校における新人教員がどのような自己研鑽を行ったのかを明らかにする目的で、看護教員歴が 3～5 年目の教員 13 名を研究参加者として半構造的面接を行い、得られた内容を質的帰納的に分析した。その結果、自己研鑽の内容として、8 カテゴリー、25 のサブカテゴリー、116 のコードが抽出された。第2段階は、第1段階の結果に文献検討を加え、119 項目の質問表を作成し、全国の看護専門学校 532 施設の 3 年目以上の教員を対象に、郵送法による実態調査を行った。回答数 300 名（回収率 28.2%）、有効回答数 298 名（28.0%）の回答から、最尤法、プロマックス回転、因子負荷量 0.4 以上の探索的因子分析を行い、自己研鑽モデルの項目として、13 因子 50 項目が得られた。各因子の Cronbach の α 係数は 0.692～0.921 で内的整合性が、また 2 群比較による交差妥当性が認められ、因子構造の妥当性が検証された。これらから、看護専門学校における新人教員のための教育実践自己研鑽モデルを作成するために、第1段階の質的データと比較検討し、項目の精選を行った結果、第1段階で得られたカテゴリーの時間軸に沿って、14 因子 53 項目が妥当であると示された。最終的に、「時間・主な出来事」「自己研鑽の主な流れ」に沿い、14 の「自己研鑽の要素」と 53 の「具体的内容」で構成される、「看護専門学校における新人教員のための教育実践自己研鑽モデル」が開発された。

本研究は、看護専門学校の新人教員の教育実践能力に焦点をあてて、今までに報告がない教育実践自己研鑽モデルを開発した新規性があり、ベテランレベルの看護実践能力とポジティブな志向性を有する看護教員への質的研究から自己研鑽の特徴を検討し、これを踏まえて、全国の看護専門学校の教員への実態調査から探索的因子分析を行い、自己研鑽の構造と内容を明示した独創性が認められる。また、新人教員が直面する講義、実習指導などの課題にどのように取り組むことで、効率的で効果的な自己学習ができるか、就任決定から 2 年間の時系列に沿って見通すことができる実用的モデルであり、新人教員個人のみならず新人教員育成の組織的な支援に活用可能性があり、発展性がある

研究と判断し、審査委員はこれらの点を評価した。

この学位論文について対面審査を行い、以下のような指摘がなされた。①第2段階の構成変更と内容の整理、②項目分析の天井効果、床効果の判定基準の明記、③因子構造の妥当性の記述の明確化、④モデルの使用法、⑤要素14の項目（具体的内容）、⑥3年課程看護専門学校以外の新人教員への適用可能性、⑦項目の表現の統一、⑧研究の限界と今後の課題への追記、などであった。その後、上記の指摘事項についての論文修正が確認された。

本学位論文は、現在の年間看護師養成者数の半数近くを養成している看護専門学校における新人教員の教育実践能力に焦点をあて、教育の質向上に貢献する教育実践自己研鑽モデルを開発したものであり、看護学教育と看護継続教育の知識体系に新たな知見を与える新規性、独創性を有しており、看護基礎教育への貢献性、発展性が期待できると認められるものであることから、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。